

Photo: 土屋ミワ



INTERVIEW

尾花賢一 KENICHI OBANA

アートから生まれた、新しい関係



羽山まり子 MARIKO HAYAMA

特集

「アーツ子ちゃんがゆく！」
～アーツ前橋のひみつ～

羽山まり子 Mariko HAYAMA

人々をゆるやかにつなぐ シンクロニシティ

THE SYNCHRONICITY OF LOOSELY CONNECTING PEOPLE

—ご出身は千葉ですよ？

はい。千葉県生まれ、埼玉育ち、東京在住です。

—アートに興味を持ったきっかけは？

中学一年生の時に『アルジャーノンに花束を』（ダニエル・キイス著）という小説を読んで感銘を受けて、小説家になりたいと思ったんです。それが高校一年生の時、クラスメイトの似顔絵を絵画調に描いていたのをまわりのみんなが褒めてくれて、そのうちの一人が「美大に行ったほうがいいよ」と言ってくれたんですよ。それで、自分には美術の才能があるのかもしれないと思って。小説家になるよりも美術のほうが先に出来そうだと思って、美術を選びました。

—小説の影響が大きかったですね。

『アルジャーノンに花束を』って凄小説で、知的障害者のチャーリーという主人公が、脳の手術を受けてIQが一気に高くなって、生活が一変してしまうんですね。その中で、人の幸福は何かとか、考えさせられるシーンがたくさんあるんです。当時、そういう哲学的な問いは表に出しちゃいけないことだと思っていたんですが、それを表現したり、問うということをしてもいいんだと、その小説を通して知ったんです。

—当初の作品は空間を使った作品ですが、こういう表現に至った経緯というのは？

大学2年生くらいまでは絵を描いていたんですけど、自分の内面的なものや他者を出合わせ、見た人にいろいろ考えてもらおうということをやろうとしていたんです。でもやっぱり絵画だとコミュニケーションの幅の狭さを感じてしまって、もっと空間を使って体験ができるような場を作りたいと思って、自然とインスタレーションという手法に変わっていきました。

—家具や日用品を作品に使う理由は？

日常と乖離したものではなく、地続きにあるものを作りたいなと思っていて。小説や映画でも、悩んだり、問題を乗り越えたり、愛情を知ったりという経験を追体験できますが、そういった構造を作りたくて。

—それらをラッピングするというアイデアがいいですね。

自分のルーツをテーマに作品を作ろうと思っ

これまでの滞在制作を通して、前橋の「まち」の姿、その現在・過去・未来が様々な角度から浮かび上がってきた。その集大成とも言えるプロジェクト「つまずく石の縁」と時期を同じくして、二か月間前橋に滞在した羽山まり子と、太田市出身の尾花賢一の二人。視点も手法も異なる二人の表現から、今度は何が見えてくるのだろう。



羽山まり子 Mariko HAYAMA

2010年女子美術大学大学院修士課程修了。大学院時代に、わたらせ渓谷鐵道沿線で行われている「WATARASE Art Project」に携わる。自分が関わった社会から集めたエレメントをラッピング、刺繍などの手法でつなぐインスタレーションを展開。「場と記憶をつなぐ「関係」の形象化」を試みている。主な個展に、「El Día de la Familia」(2019年、Escuela Normal Superior de México/メキシコシティ)「羽山まり子展・マイホーム」(2013年、LIXILギャラリー／東京)、「複合回路vol4 羽山まり子展」(2010年、gallery α M／東京)など。2011年「川口の新鋭作家展」最優秀作家賞受賞がある。



《肉体へ回帰せよ》2012 Photo by ken Kato

た時に、自分の生まれ育った家庭のことを描くうえでラップフィルムが合うなって思ったんですよ。自分が暮らしていた家にあったもの、家庭を構成していた様々なものをラップでくるんだ状態のイメージがパッと浮かんで、それを作品にしたんです。この作品は不思議で、本来は私の記憶の中にあるはずのものなのに、見た人が自分の記憶を蘇らせてくれるんです。ラップというフィルターを通して想起させているそれぞれの記憶は全く別でありながら、何かを共有した気になったり、温かい気持ちになるという体験があって、その時に「シンクロニシティ／共時性」っていうテーマが生まれたんです。

—前橋で物語を集めるというプロジェクトを始めた理由は？

これは新たなチャレンジで、これまでは物に込められた記憶を集めてきたんですけど、記憶そのものを集めたいと思ったんです。物に込められた記憶だと、人と人との間に壁があって、物というフィルターを通してじゃないと繋がれない。それだけではなく、直接その人自身に繋がりたいと思って。それで、直接の声や記憶を集めるということを始めました。

—滞在制作で行ったピクニックプロジェクトもその一つですね。

そうですね。2か月の滞在中に、街の人から物語を集めるために始めたんですけど、このプロジェクト自体が面白い広がりを見せてくれて、独立した作品のようになっています。初めて会う人たちと一緒にピクニックをして最後に写真



《どこでも Picnic Project @ ハラサワコレクション VOL.7》2018

尾花賢一 Kenichi OBANA

記憶の交差する場所で 新たに生まれてくるもの

SOMETHING NEW IMAGINED AT INTERSECTION OF MEMORY

—子どもの頃から絵を描かれていたんですか？

幼稚園の頃から地元の絵画教室に通っていて、その頃からずっと油絵を描いていましたね。油絵が自分の生きる道だと思いながら大学まで進んで、そして踊いたって感じです。

—その時に何か大きな変化は？

やっぱりその時期に芸術に関するいろいろな知識に触れて、油絵、いわゆる洋画と言われるものはもう古いんだと周りの人に言われて。やっぱりもっと違うものに触れたいとか、自分とは違う何かそういう存在になりたくて、ちょっと無理でしたんです。ちょっと流行ってるものとか、今売れてる人の模倣をしたり。そうする中で自分のベースを狂わせて制作ができなくなった時期がありました。21歳から29歳くらいまでは、自分が作りたいものがどんどんわからなくなっていった時期でしたね。

—それが吹っ切れたきっかけは？

子供が産まれたんですよ。妻の地元の秋田県で里帰り出産をしたんですが、その期間、本当に何もできない時間が1ヶ月くらいあって。今までは苦しいながらもずっと何かしら作ってんですけど、その時間は本当に空っぽの時期だったんです。それで、妻と散歩しながら話をしたりしている中で、本当に何のきっかけもないんですけど、なんかもう違ったことやってみようかって急に思い立ったんですよ。別に何かに出会ったとか、流れ星が落ちたとか、具体的になきっかけはないんですけど。

それから子供が産まれて、自分の家に帰って彫刻を始めたのが転機かなって思います。それまでは僕には油絵しかないっていう、子供の頃からのアイデンティティみたいな考えで固まっていたのが、初めてそうじゃないものをやってみようかって思えて。

Photo: 土原 川



—それまで彫刻の経験は？

全然やってなかったです。本当、急にですね。とりあえずホームセンターに行って一番安く売っていた木の塊を買ってきて、それをノコギリと彫刻刀で削りだしたのが最初です。彫刻刀も本当に版画セットみたいな、あの彫刻刀で、自己流で始めました。その前は描いても形にならずに終わっていたのが、削れば形に出てくるんです。それが嬉しくて。たまたまその翌月に展示があったのでそこに出したら意外と反応が良くて自信ができましたね。絵のほうも、もっと水彩絵の具とか鉛筆とか、油絵から離れて違うもので描こうかって思い始めたのもその時期です。

—この劇画タッチの作品は何の素材で描いているんですか？

墨とペンです。2017年にアメリカで展示をする機会があった時に、こういう漫画、絵の連続でストーリーが進むという方法でやってみようと思ったのがきっかけでした。彫刻をやっていると、形を作り出すのにノミや彫刻刀の跡が細かく残るんですが、それが絵になった時に、こういう細かなタッチの劇画調になったのかなっていうのもありますね。僕の彫刻って割と刃の跡が残るんですけど、それも油絵で筆の跡を残したり隆起させたりっていう感覚が繋がってきてるのかな。だから油絵の時と全く別のことをやってるっていうよりも、これは繋がってるんだと思います。



《森の奥、そして》2017年、インク・ワトソン紙、作家蔵

尾花賢一 Kenichi OBANA

1981年群馬県生まれ。2006年筑波大学大学院芸術研究科洋画コース修了。主な個展に、2018年「森の奥、そして・前編・後編」(hggrp GALLERY TOKYO、東京)、2017年「森の奥、そして」(アトリオン 秋田総合生活文化館・美術館、秋田)など。主な受賞に、2015年 Tokyo Midtown Award 2015 優秀賞、2014年 LUMINE meets ART AWARD 準グランプリなど。http://www.obanakenichi.com/



—彫刻作品はカラフルで絵画はモノクロでも、細部には共通したものがあるんですね。

今はどういうメディアでも、それほど自分が作ってきたものと離れないだろうな、嘘がなく作れるだろうなと思うので、彫刻だとか絵画だとかってあんまり意識しないですね。それがどう変わっていても自分の足元からは離れないだろうなと思うので。もしかしたらダンスを始められるかもしれないし、手品をしりするかもしれないし、前橋で何かとんでもないことを始めるかもしれないです。

—前橋では「辻」をテーマに作品を作ること考えているそうですが。

やっぱり記憶の中で、ギュッと尖った道がぶつかり合う場所とか、その間に古めかしいお店があるといった光景が、前橋をイメージした時に真っ先に出てきたんですよ。辻はいろんな人や物や事が行き交う場所で、いわゆる歴史のような、文字として残される物語だけではなく、もっと個人的ないろんな想いとか記憶を形作る場所として、今回触れてみたんです。

—真鶴でも作品を制作中ですが、やはりその土地に関係した作品なんですか？

そうですね。もう事前に下見をしてこれを作ろうって思って、3ヶ月ぐらい準備して搬入したんですよ。でもなんか違うなって思って、全部止めて、今作り変える最中なんです。やっぱりどうしても現地を見たり、その場所に触れると変化するものがいっぱいあると思っていて。苦しいけど受け入れた方が良くなることが多いんですよ。なので前橋でも出発は「辻」から始まると思うんですけど、きっと変化していくだろうなと思ってます。でもそれが滞在制作の面白さなのかなとも思いますね。

2019年1月22日収録 聞き手：殿岡 渉

●オープスタジオ

2019年3月17日(日) 11:00 - 19:00

●アーティストトーク

同日 14:00 - 15:00

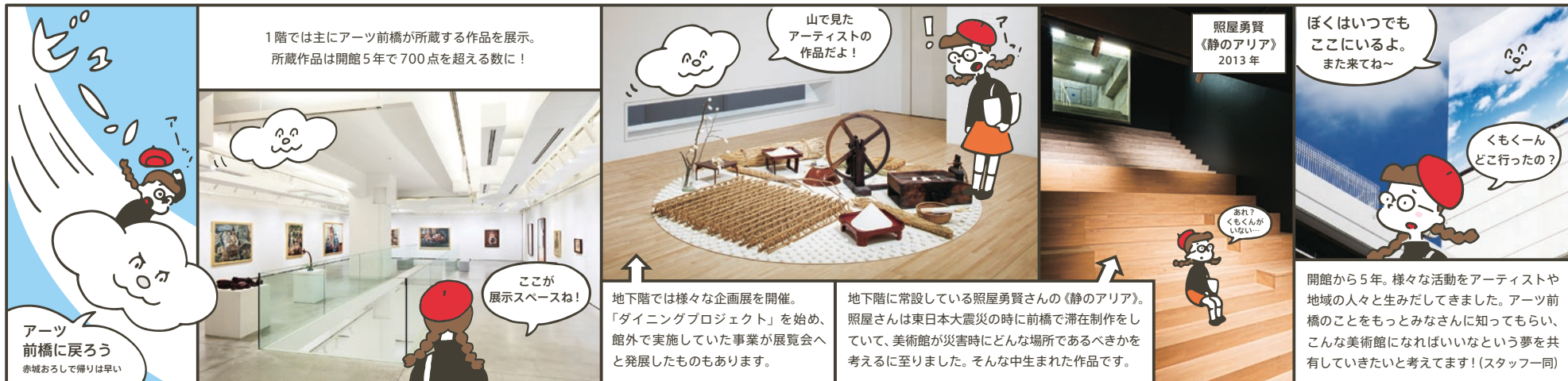
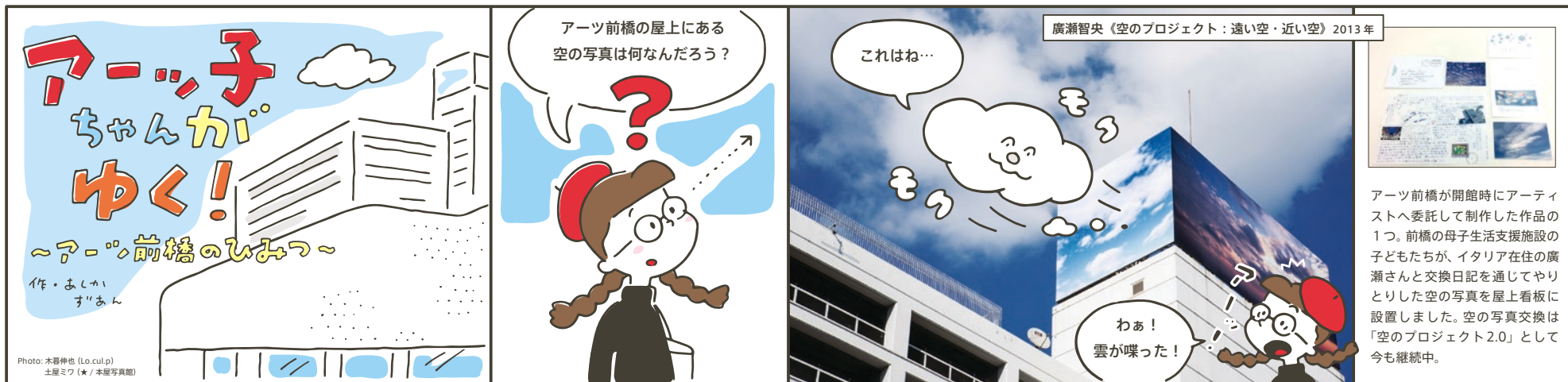
会場：堅町スタジオ

滞在制作での成果発表やアーティスト

トークを行います。詳細はアーツ前橋

HPをご覧ください。

<http://artsmaebashi.jp/?p=12652>



ほかにも館外で継続して行っているプロジェクトをご紹介します

アーティストインスクール

アーティストが学校へ向かいワークショップや授業を行うプログラム。2016年から前橋市内の小中学校・高校で実施しています。アーツ前橋の展覧会や滞在制作に参加中のアーティストが授業を行ったことも。一日で完結する授業から、長期的に子どもたちと関わるプログラムもあります。子どもたちがアーティストと共に学ぶことで生まれる新たなコミュニケーションや、アーティストの社会的な役割を探るプロジェクトです。



表現の森

アーティストと前橋市内の5つの団体や施設が協働するプロジェクト。引きこもりなどの若者のためのスペースや老人ホームといった福祉・医療・教育の現場で、アートの持つ創造力の可能性を探る試みです。2016年の夏には「表現の森 協働としてのアート」と題し、アーツ前橋のギャラリーでプロジェクトの経過報告や展示を行いました。今後も継続していくプロジェクトです。
<https://www.artsmaebashi.jp/FoE/>



前橋のあちこちにアーティストが入り込んでいるのね~!

WORKS 収蔵品紹介

アーツ前橋では、平成29年度に12作家38点の作品を新たに収蔵しました。前橋市がこれまでに収蔵してきた作品は約710点になります。これらの美術作品は、市民にとって大切な宝ものであり、未来へ残して伝えていく贈り物です。ここではその中から一点を紹介します。

近藤嘉男《分有の鳥》
KONDO Yoshio *Birds of Methexis*
昭和49 (1974)年 油彩、カンバス
昭和52 (1977)年 年度購入



魅せられて、エーゲ海

近藤嘉男は、前橋ゆかりの画家として知られる人物です。戦後まもない1940年代末から画家として頭角を現した近藤は、焼け野原だった前橋に「ラ・ボンヌ」という子ども絵画教室を立ち上げます。復興する社会にいち早く創造と表現の場を求めた近藤の活動は、戦後前橋における芸術文化の礎を築きました。

1964年から1975年まで近藤はギリシアを三度訪れ、ギリシア哲学や紀元前2000年頃のエーゲ文明の造形に傾倒しました。「分有」(メテックス)は、ギリシアの哲学者プラトンが用いた言葉です。世の中に

ある美しいものは、なぜ美しいのか。それは美のアイデア(現実を超越した永遠不変の美そのもの)を分有しているがゆえに、その個物は美しいのだとプラトンは説きます。近藤が描く鳥たちは、美の本質を森羅万象に分け与えるために飛ぶ「使い」なのでしょう。近藤はリアリズムの画家として、無節操で複雑な戦後日本の変転を鋭く深く見つめてきました。しかし最晩年に制作された本作では、複雑で煩悩しい現実をまるで遠くを見るように、超越的な美への憧憬が表現されています。

滞在制作アイデア

滞在中には実現しなかったけれど、前橋のまちなかに滞在したからこそ生まれたアイデアを紹介いたします。

ARTIST
梅沢英樹
UMEZAWA Hideki
滞在期間：25日間 2016年12月3日~12月27日

● まちなかを使ったプロジェクト

音になる装置をまちなかの様々な場所に設置して、時間をずらして音を発することで、まちを回避してもらうようなプロジェクト。

● サウンド・メモリー・アンサンブル

街の人が所有しているカセットや、VHSビデオ、8mmフィルムなど眠っている古いメディアを集めて、街の記憶や、人や生活の痕跡のようなものをよみがえらせるような音と映像のインスタレーション。

● エオリアンハーブ

前橋で生活をしていて、やはり風がとても強いと感じた。そこから、風を音に変換する装置を建築と組み合わせると面白く考えた。17世紀頃から存在する弦が強い風を受けて振動することによって音が発生するエオリアンハーブの原理を取り入れ、まちなかの様々な建築物に弦を張り、風が吹くたびに音になる作品。アーツ前橋の屋上に設置しているコミッションワーク《空のプロジェクト：遠い空、近い空》の上に弦を張るとよい。

TOPIC 身体芸術推進実行委員会



多様な身体表現者たちが織りなす新しい演劇のかたち

ダンスや演劇、ポエトリーリーディングやパフォーマンス、音楽演奏など、芸術作品だけでなく展示しておくことができないからだの表現、それを身体表現とよびます。「身体芸術推進実行委員会」は身体表現で活動する前橋周辺の表現者が構成員です。2017年、「身体拡張ラボ」という身体表現者のためのワークショップに端を発し委員会を結成。2018年はアーツ前橋での「身体拡張2018 公園デビュー」、岡本太郎の《太陽の鐘》完成記念式典セレモニーでのパフォーマンス「オープンマイク&フリーセッション前橋れんが蔵」など、イベントを通して表現者同士の出会いや、新しい創造の場を作り続けてきました。

委員会は2月24日から3月、「前橋身体論 早春セミナー2019」というイベントを開催しています。これはアーツ前橋の「間に刻む光 アジアの木版画運動1930s-2010s」展に連動して学び、そこから作品や活動を導くという「演劇」です。演劇ですが脚本も舞台もない新しい形の演劇です。講座プログラムは6コマの研修型ワークショップと4種の演習型セミナー、そして最後にふり回りのフォーラムで構成されます。好きな講座に応募し受講できます。まるで学校のようですが本物の学校ではありません。ただそこで学ぶことは真実です。そこにはフィクションから真実を語るという演劇の概念があるのです。ぜひご参加ください。<http://www.facebook.com/2019m.ss.seminar/>

EVENT

まちなかイベント情報

前橋文学館企画展

「おばあちゃんのほっこりごはん 野村たかあき展」

1月26日[土] - 4月7日[日] 9:00 - 17:00
前橋文学館 3階オープンギャラリー
前橋市在住の彫刻家・絵本作家、野村たかあきによる「おばあちゃん」シリーズの絵本の世界を、文学館の展示空間に再現します。

第三回 文学フリマ前橋

3月24日[日] 11:00 - 16:00
前橋プラザ元気 21 1階 にぎわいホール
幅広いジャンルの文学作品を出店者が自ら販売する
入場無料の展示即売会。
<https://bunfree.net/event/maebashi03/>

反町潤 個展「can you see it? vol.3 UNSPOKEN WORDS」

3月16日[土] 17日[日] 18日[月]
23日[土] 24日[日] 12:00 - 19:00
map 前橋「市民」ギャラリー
<http://www.facebook.com/maebashiartpractice/>

にしのおきひろ 絵本ギャラリー 「えんとつ町のプペル ひかる絵展 in 群馬」

3月16日[土] - 31日[日]
平日: 10:00 - 18:00 土日祝: 10:00 - 19:00
前橋芸術文化れんが蔵
全国38ヶ所、ベトナム、香港、フィンランド、ニュー
ヨークなど世界各地を巡る展覧会がれんが蔵で開催
されます。入場料: 500円(中学生まで無料)

今月のおすすめ

by
ROBSON COFFEE
アーツ前橋店



毎日14時～17時までの「ケーキセット
タイム」は、ショーケースから選べる
自家製ケーキとドリンクがセットで
770円とお得。この時期おすすめの
ケーキは、ほろ苦いキャラメルと洋ナ
シの爽やかな甘さが絶妙なハーモニー
を奏でる「キャラメルポワール」。旬の
コーヒーとセットでお楽しみください。

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報

闇に刻む光 アジアの木版画運動 1930s-2010s

2019年2月2日[土] - 3月24日[日]

開館時間: 11:00 ~ 19:00 (入場は18:30まで)

休館日: 水曜日

会場: アーツ前橋 地下ギャラリー

観覧料: 一般 500円 / 学生・65歳以上・団体(10名以上) 300円 / 高校生以下無料

※障害者手帳等をお持ちの方と介護者1名は観覧無料

※3月21日(木・祝)は、「国際人種差別撤廃デー」のため、観覧無料

※前橋市内日本語学校(告示校・6校)に在学している外国人留学生は観覧無料

※本展会期中割引…以下の条件でご来場の方は、観覧料 300円

①トワイライト割: 開館中の17時以降にご来場された方

②映画割: 前橋シネマハウスで上映する「タクシー運転手」「1987、ある闘いの真実」
の半券をご提示の方。

主催: アーツ前橋、読売新聞社、美術館連絡協議会

共催: 福岡アジア美術館

協賛: ライオン、大日本印刷、損保ジャパン日本興亜、日本テレビ放送網

後援: 上毛新聞社、朝日新聞社前橋総局、毎日新聞前橋支局、産経新聞前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、
NHK前橋放送局、群馬テレビ、FM GUNMA、まえばし CITY エフエム、前橋商工会議所

レオニーリョ・オルテガ・ドロリコン (フィリピン)
《農園のなかで》
2014年 福岡アジア美術館蔵



木版画は、特殊な素材や道具を必要とせず、また安価に複数の作品を制作できる DIY 的な簡便さゆえに、美術の世界を
超えて、アジア各地の政治・社会運動のなかでしばしば制作されました。自分の感情を主体的に表現し、社会の問題をえ
ぐりだし、遠隔地の人々との連帯を求める「メディア」として、木版画はアジアの近代化に重要な役割を果たしました。

1930年代に魯迅が推進した木版画は巨大な運動体となって中国各地で展開します。日本では戦後の民主化運動やサー
クル誌で木版画が扱われ、多数の中国版画展が開かれました。ベンガルの独立運動、ベトナム戦争、フィリピンの闘争、
韓国の民主化運動などをテーマとした木版画(リノカットを含む)作品と版画を掲載した印刷物などの資料あわせて約
400点を紹介します。木版画を大衆的な「メディア」としてとらえ、異なる時代と地域をつなぐ版画運動のネットワーク
に注目する本展が、日本を含むアジア近現代美術史全体をとらえなおす契機になればと思います。

&Arts ISSUE 16

アンドアーツ 第16号

発行: 平成31年3月16日 企画・発行: アーツ前橋 制作コーディネート: 一般社団法人前橋まちなかエージェンシー
アートディレクション・編集・デザイン: 殿岡 渉(あしか図案) 写真: 土屋ミワ(本屋写真館)、木暮伸也(Lo.cul.p)
ロゴデザイン: 荻原貴男
アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町5-1-16 TEL: 027-230-1144 FAX: 027-232-2016

